

フロントランナーとしての日本の環境保全活動

— WCRPⅧに参加したことでの気づき —

町田 勝 (21イーネット株式会社代表取締役)

1.はじめに

東京大学名誉教授で科学史学者の伊東俊太郎先生は人類史の中で、現在に至るまでに5つの革命・転換が起こったと述べている。それは、①人類革命：200～1万年前、②農業革命：1万～5千年前、③都市革命：前3500～前1500年、④精神革命：前8～4世紀、⑤科学革命：17世紀から現在で、21世紀は間違いなく環境革命の時代になるとしている。

その中で精神革命の時代には、釈尊、キリスト等の聖人による精神上的革命が行われ宗教教団が作られた。そして、それぞれの宗教の教義に沿って別々の道を歩み始めることになった。

精神革命から約2500年経過した20世紀の先達は、別々な歩みの先に求める到達点、すなわち目的は同じ「平和な世界を築く」ことであると信じた。そして、並々ならぬ努力を重ね、1970年に39ヶ国、約300人の宗教指導者が京都に集まり、第1回世界宗教者平和会議(WCRPⅠ)を開催することができた。

そのWCRPも世界各地を周り、8回日の集まりとして2006年8月26～29日、再び京都の地において開催された。WCRPⅧには、世界の約100ヶ国、800人の宗教指導者に加え、国際連合やNGO(非政府組織)等の一般からの参加者を含む約2000人が集まった。

議題は紛争解決、平和構築、持続可能な開発の3つに分かれ、各々の研究部会が開かれた。さらに、紛争解決は紛争予防、紛争調停・交渉、和解と癒しの3つ、平和構築は武器拡散・軍縮・安全保障、暫定的公正と人権、平和教育の3つ、持続可能な開発は子どもとHIV/エイズ、貧困撲滅、環境の3つ、合計9つの作業部会に分かれて議論がなされた。

その作業部会の1つに、前述した伊東俊太郎先生が示された21世紀に起こるであろう革命の環境も取り上げられている。このことは、環境問題の解決を30年間続けてきて、環境NGOの立場でWCRPⅧに参加した筆者にとって意味深いことであった。

なお、4日間を通して持続可能な開発研究部会の環境作業部会に参加したので、そ

の場で感じたことを踏まえた筆者の意見を述べる。

2.超想定外の環境問題に触れて

昨今の日本では、しばしば想定内とか想定外という言葉が使われている。この言葉の意味するところは、我々の過去の経験からある程度の想定ができ、その想定の中で判断し外れるのかを議論することであるが、おのずと我々の思考の及ぶ範囲に限られる。

ところがWCRPⅧの報告で、日本を含めた経済的に豊かな国では考えも及ばない、想定外の範囲をはるかに超えた無茶苦茶な環境問題が、貧しい国で現実に行っていることを、おぼろげながらも感じることができた。

具体的には、アフリカ諸国での放射性廃棄物の不法投棄の問題がある。本来、放射性廃棄物は厳重に管理され、不法投棄されることはない。ところが、豊かな国が貧しい国に対して条件付きの援助金を出すこと、すなわち貧しい国の上層部が金品を受け取る不正義により、援助というかたちで放射性廃棄物の不法投棄が公然と行われてしまっている。

また、環境問題は人口問題ともいわれており、地球全体で毎年7300万人(ワールドウォッチ)が増え続け人口爆発の状態に至っている。人口爆発の要因は、出生数と死亡数のバランスにあり、第二次世界大戦後に出生数が減少しているもののそれ以上に死亡数が減少したためである。

しかし一方、貧しい国では新生児の死亡率が異常に高い問題があり、「世界では、予防可能な方策があるにもかかわらず、毎日400万人の新生児が生まれて4週間以内に死亡している。」と報告された。この400万人を年間に換算すると約15億人で、世界人口の4分の1に相当する。それほど多くの新生児が、表の人口データとして現れない隠れた状態で死亡している。このことを聞くと、人口問題は出生数と死亡数のバランスだけでは済まされない根本的な対策が必要であると感じる。

これらの他にも多くの事例があると思われるが、その背景に自由貿易協定の不平等さ、格差社会、政治の腐敗、性差別、教育の不足等さまざまな要因があると思われる。それはどうも、豊かな国の人々が飽くなきアメニテ

ィーを追求し、それからはみ出したゆがみ部分を貧しい国に押し付けてしまっている平等を欠いた行為に見えてくる。

このような、超想定外の環境問題が地球上で起こっている事実を知り得たことは、今後の環境問題への取り組みや我々の生き方を考える上での重要なヒントとなった。

3. フロントランナー日本の環境保全活動

WCRPは36年前に、日本のイニシアティブによってスタートした。どちらかというときキャッチアップ型の取り組みを得意とする日本では特異な展開であり、目に見えぬ神仏の御加護があったからであると思われる。

そのWCRPの議題の1つとして、環境が取り上げられている。日本は、公害を克服した経験が豊富にあるとともに多くの自然環境にも恵まれている。そのため、フロントランナーとして地球の環境保全活動を押し進めていく条件が整っていると思う。そこで、日本が行うべき2つの環境保全活動を示す。

3-1. 足るを知る

ノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイ女史が日本には良い言葉があるとして「もったいない：MOTTAINAI」を広めてくれた。

この言葉と同じように、循環型社会での考え方に「足るを知る」があり、仏教国の日本人には素直に受け入れることができる考え方である。元宮崎銀行頭取で仏教経済学の提唱者である井上信一先生は、「幸せの方程式」で、これからの人々の心構えを示している。

$$(\text{幸せ}) = \frac{(\text{財})}{(\text{欲望})}$$

この方程式の意味は次の通りである。「分子を大きくすることによって、幸せになろうとするのが欧米式であるとすれば、分母を小さくしようとするのが東洋式、いや仏教式である。」「もし人々が足るを知ったら、消費は落ち込んでたちまち低成長になってしまうと、経済人は色をなくすであろう。だが、今や何らかの低成長を覚悟することなしには地球を危機から救うことはできないのである。」

この「足るを知る」の考え方を、日本が中心となって世界に発信していくことが必要である。なお、環境分野では「簡素：KANSO」という言葉がとても多く使われている。この「簡素：KANSO」を「足るを知る」の実践の

合い言葉として、世界に普及させたいと思う。

3-2. グリーンとブルーを目指し

環境保全活動の目的を色で表現すと、グリーンとブルーの2色が思い出される。グリーンは木々や草の豊かな緑で躍進する大地を意味している。ブルーは大空の澄んだ青であり、海や河川の清らかさでもある。幸せなことに、自然に恵まれた日本ではこのグリーンとブルーに接する機会が多い。

ところが、地球上の比較的多くの人々は、このグリーンとブルーを知らない。大地は黄色い砂漠であったり、海や河川がないところも多く、濁った大河が普通である。このようにグリーンやブルーにはほど遠い色を、本来の自然の色と思い込んでいる。唯一、大空のブルーを見る可能性はあるとしても、その大空さえ知らない人々もいる。

そこで、大きな自然の包容力に包まれ、自然と人間が共生しグリーンとブルーに親しんでおり、自然保護を最も重要と考える人々の割合が高い日本がリードし、そのグリーンとブルーの援助活動を展開するのである。

その方法としては、現在NGO等で行われている砂漠への植林援助活動を継続して進める。加えて、グリーンとブルーを知ってもらうために、色々な機会を通して各国の環境担当者を日本に招聘し、実際に体感してもらうことである。そのような、自然と人間が共生できる場を残し維持することも必要となる。

4. おわりに

東京大学名誉教授で地球環境変遷史学者の濱田隆士先生は、世界の平和をおびやかすものとして、特に重要な4つを示している。それは、①核戦争再発への危惧、②民族・宗教間対立の激化、③エイズなどの悪性感染性疾患の急増、④地球環境の悪化と対策の遅れ、である。この中の地球環境の悪化について見ると、その大きな要因として、人々の飽くなきアメニティーの追求が上げられている。

WCRPⅦでは、これら4つの重要な問題を網羅するとともに、さらに多くの問題が議論された。そして、宗教者としてどのように実践していけば良いのかが示された。

筆者も、環境の分野を中心にWCRPⅦで示された実践の道を自らのものとし、一歩づつ自覚を持って歩んでいく所存である。